「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局　〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 ／TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表　中條 智子
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」（ubumwe）とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

苦境を共に生きる

佐々木 和之
ささき　かずゆき

５月４日、六週間に及んだ新型コロナ感染拡散防止のためのロックダウンが一部緩和されました。まだ人々が相互の家を訪問することは禁止され、夜間の外出も禁止のままです。しかし、私が暮らすルワンダ南部の主要都市フィエの町を訪ねると、それまで政府の命令により閉鎖されていた商店の多くが開き、マスクを着用してはいるものの、以前のように多くの人々が町を行き来しているのを見て心が躍りました。

昨日、車を運転し、虐殺生存被害者である女性たちと加害者を夫に持つ女性たちが共に働く協働グループ、ウムチョ・ニャンザの工房を訪ねました。これまでフィエの町の境界外に出かけることが禁止されていたため、ほぼ二カ月ぶりの再会でした。工房に集まった女性たちと、最初はコロナ禍が始まってから定着したお互いの肘を突き合わせての挨拶を交わしました。しかし、遅れてきたエスペランスさんが、それまでその部屋を覆っていた何とも物足りない雰囲気を一瞬にして打ち壊しました。彼女は、それまで距離を置いて椅子に座っていた私たち一人一人に、「神様に感謝！元気にしてる？」と言いながらハグを繰り返したのでした。私もコロナウィルスのことなど忘れて、彼女と抱擁し再会を喜び合ったのでした。

その後、離れていた間どのように過ごしていたかを分かち合いました。ロックダウンのため全く市場での穀物販売などの仕事ができなくなり、収入を一切断たれたというアミーナさんが涙ながらにその時の心境を語りました。フランソワーズさんは、コロナ危機が襲った時期がちょうどジェノサイド記念期間と重なり、精神的にひどく落ち込んだと話しました。今回、外出禁止令が出され、家に閉じこもり近親者以外とは会うことが出来なったこと、また、交差点等に警察官が立ち、外出者を取り締まっていたことなどが、ジェノサイド当時の状況と重なったと言うのでした。ルワンダの人々は、４月７日からの一週間をジェノサイド記念期間として過ごします。しかし、今年は人々が共に集い、身体を寄せ合って過ごすことができませんでした。

夫が虐殺加害者として刑務所にいるエレナさんは、普段なら他の人の農地で働くことで生活の糧を得ています。彼女は、ロックダウンが始まっ

てから仕事がなくなり、子どもたちに食べさせる食料も尽き、途方にくれた時の様子を語りました。女性たちの何人かは、ウィルス感染の恐怖、生活の困窮、いつ状況が良くなるのか全く分からないことから来る不安の中で、絶望しかかったというのでした。

しかし、彼女たちはその苦境を生き延びました。勇気を出して助け合うことによって。ロックダウン導入から 10 日が過ぎた頃、グループの世話役たちが電話で連絡を取り合い、銀行に預けてあった運営資金から、日本円で 2,300 円に相当するお金をそれぞれの口座に振り込むことを決めたのでした。女性たちは、携帯電話で伝言ゲームのようにその朗報を一人、また一人と伝えていきました。電話が不通になっていた仲間には、警察に拘束されないように、裏道を通って仲間の女性の家まで行って伝えたのです。その時の苦労話を複数の女性たちがユーモラスな語り口で笑顔を見せながら話してくれました。そして、昨日集った全ての女性たちが、そのお金を手にしたときの喜びと感謝、「一緒に働いてきて良かった」と心の底から感じたことを語っていました。

私自身は、外出制限や集会の禁止なども大変ですが、ルワンダ教育省の決定により、全ての教育機関の閉鎖が９月まで延長されたことに正直がっかりしています。オンライン授業に意欲的に取り組み、学生たちも予想していた以上に積極的に参加してくれているものの、お互いの熱量までは伝わりようがありません。教会で共に礼拝を守ることもできませんし、州の境界を越えて移動し、友人・知人を訪ねることもできないままです。予定していた農村調査やキレへの養豚組合訪問もいつできるか分かりません。給料を大幅にカットされた人々、契約を一時停止された人々、あるいは収入を全く断たれ、経済的に追い込まれている人々が増え続けています。

いつこの暗いトンネルを抜け、以前のような日常が戻ってくるのだろうか？　あるいは二度と戻ってこないのではないか？　そんな不安がときおり脳裏をかすめながら、それでも何とか日々成すべき務めを成し、日常のささやかなことに喜びを見出そうとしながら過ごしてきたように思います。

「わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」（ローマの信徒への手紙 5:3-4）

これは使徒パウロが獄中で綴った言葉です。私は、長丁場になるであろう今回の危機的状況を生き抜くためには、練達とまではいかないまでも、行動の自由が制限され、実際には直接会って何かをすることが出来ない中で、どのように「分かち合う」ことを続けていけるのかが大切だと強く感じています。どのように日々の生活の中で体験したこと、感じたことを分かち合うのか、お互いに励まし合い、他者の必要に応えていくのか、また、共に創造的な交わりを作りあげていくのかが、これまでの人生の中で今以上に問われていることは無かったように思うのです。

現在進行中のコロナ危機は、グローバル資本主義経済の脆弱性や自国中心主義の限界をはじめ、様々な問題を私たちに投げかけています。コロナ後の社会の在り方、あるいは社会変革の必要性について、多くの識者が論じているのをネット上の記事などでよく目にします。それらを読みながら、「今を生き延びることが先決だろう」という思いがよぎります。確かにコロナ禍から問われていることを、よりよい社会の在り方を考えるきっかけにしなければと私も思います。ただそれと同時に、私たちが今日一日をどのように生きるのかが問われているようにも思うのです。案外、コロナ後の社会の在り方は、苦境の只中にあって、私たちが今をどのように生きているのかによってずいぶん変わったものになるのではないでしょうか。

自由が制限されていようと、家にいることを強いられていようと、私たちにはできることがあります。祈り合い、言葉を送り合い、励まし合い、

ネット上でも創造的な交流ができます。家にいながらにして、困窮の中にある他者を支援する活動に繋がることもできるでしょう。場合によっては、社会的制裁やウィルス感染のリスクを冒してでも、困窮の中にある方々のために支援を届けるということも不可能ではありません。ウムチョ・ニャンザの女性たちが、警察に拘束されるリスクを冒し、裏道を選びながら仲間の家を訪ねたように。

この苦境がただ過ぎ去ることを待ち望むことからは本当の希望は見えてきません。また、以前の日常を取り戻すことが希望であってはならないとも思います。今日一日、私が出会うお一人お一人と、どんな形であれ共に希望を見出していくこと。その希望を紡ぐ営みに具体的に関わり、今、祈り行動していくことが大切なのです。そして、やがてコロナ禍を生き延びた時に、その方々との関係がより強く愛に満ちたものになっていることを心から願います。そこからしか、コロナ後にあるべき社会を創る営みは始まらないのではないでしょうか。

■ 近況報告

日本の新型コロナウィルスによる緊急事態ということで、未だに不自由な生活を強いられておられる方々が、この記事を読んでおられる皆さまの中にもおられることでしょう。ウィルス感染により苦しんでおられる方々はもとより、命の危険に晒されながら働いておられる医療従事者の方々、そして、休業要請による減収で厳しい状況に追い込まれておられる方々のことを特に覚えて祈っています。また、命が脅かされている現場からの声が何とかして為政者に届き、弱い立場にある方々の命と生活を再優先する措置が打ちだされていくようにと祈っています。

ルワンダはまだ安心はできませんが、政府が積極的にＰＣＲ検査と感染者の隔離を進めていることや、早い時期から実施されているロックダウンが功を奏し、新型コロナウィルスの感染拡散を封じ込めています。政府の情報では、ウィルス感染者が累計で 308 名、死亡者は出ていません。しかし、既に触れましたが、長引く経済封鎖措置により無収入の状況に追いやられ、食事の量を減らしながら何とか飢えをしのぐという状況に陥っている人たちも少なくありません。私が勤務する PIASS では、しばらくの間授業料の収入が見込めないことから、少なくとも５カ月間、全教職員の給与が７割カットされることが決まりました。

PIASS は３月下旬に閉鎖され、25 名の留学生以外は皆それぞれの家族の元に帰って生活しています。４月からオンライン授業に切り替わりましたが、多くの学生たちが経済的な理由から十分にインターネットを利用できませんので、WhatsApp という Line のようなアプリを使い、授業の要点をまとめたスライドを写真に撮って掲示、音声メッセージの送信、チャット機能による対話等の方法を駆使して授業をしています。「非暴力の理論と実践」と「平和学入門」をそれぞれ平和・紛争研究学科の２年生と１年生を対象に実施していますが、学生たちが予想していた以上に積極的に参加してくれ、いろいろと面白い発見があります。平和学入門の授業は、平和・紛争研究学科の卒業生で、今年１月にアントワープ大学「ガバナンスと開発」修士課程を修了したリエス・ホリンベレさんと一緒に教えていますが、教員冥利に尽きる思いです。

昨年から東京外国語大学に留学しているヘレンさんとオクターブさんは、学生寮から学生たちがいなくなり、寂しい思いをしているようですが、４月からオンライン授業に意欲的に参加しています。また、９月末から東京外大に留学する２名の学生たちが決まりました。次号で彼らのことをご紹介いたします。彼らの航空チケット代と生活費の一部を賄うため、東京外大・現代アフリカ地域研究センターがクラウドファンディングを実施して下さり、100 万円の目標額を達成しました。ご協力下さった皆さま、ありがとうございました。

絆の再確認

佐々木　恵
ささき　めぐみ

昨日５月９日、ロックダウン以降初めて、久しぶりにウムチョ・ニャンザの女性たちと会ってきました。ほぼ八週間ぶりの訪問でした。14 人のメンバーのうち一人だけ欠席でしたが、メンバー間でも久しぶりに会う人たちが多く、皆とても嬉しそうに再会を喜んでいました。初めは接触を避けて挨拶していたものの、そのうちに、そんなことは御構い無しになり、結局はお互いハグしあって喜び合うほどでした。

8 週間ぶりに女性たちと再会

前回、日本で販売した布バックの収益金の分配の仕方について意見の対立が持ち上がっていることをお伝えしました（ウブムエ 48 号参照）。その後の話し合いの結果、布バックの製作一枚につき２千フラン（約 230 円）の縫製代が支給されることに決まり、各人製作数に従ってその報酬を得たようです。多く縫った人では５万フラン（約 7,500 円）ほどを受け取れましたが、病気やその他の理由で一枚も縫えていない人もいたことから収入の格差が生まれ、そのことがメンバー間に緊張を生み出す結果にもなってしまいました。2019 年秋の帰国時に販売した布バックは合計 64 枚。1 枚につき現地価格 6 千フラン（計 38 万４千フラン）で買い上げていますので、縫賃 12 万８千フラン（2,000×64）を差し引いた残り 25 万６千フラン（約 38,000 円）はウムチョの販売収益になります。また、日本では一枚 2,000 円で販売しましたので、その売上金と買い上げ金の差額約 70 万フラン（約 105,000 円）は寄付という形で、これもウムチョの会計に入れました。

その他、２月には PIASS であった二つの会議の参加者用に布製バックを納入したこともあり、ウムチョの会計は大分潤ってきているわけですが、今回のロックダウンで女性たちの生活が逼迫していたということから、役員たちが話し合って、緊急援助金という形で一人２万フラン（約 2,300 円）をウムチョの収益金の一部から各人の銀行に振り込む決定をしたのでした。昨日の話し合いでもそのことに関する意見が多く聞かれました。そのなかで印象的だったのが、ママカドゴの発言でした。彼女はロックダウン前のある期間、親族が亡くなったことが原因で精神的にとても落ち込み調子が悪く、ほとんど活動に参加できていなかったというのです。布バック製作に当てる時間も取れなかったことで、縫製代としての収入もありませんでした。メンバー間の収入の格差は仕方がないと思いつつも、不満があったのではないかと想像されます。でも、そんな彼女に対しても他のメンバーと全く同様に２万フランが支給されたことに対して本当に喜び感謝していたのでした。

一方アミーナさんはこれまで日雇いの仕事で収入を得てきたのですが、今回のロックダウンの影響でそれができなくなり、豆の小売商いも収入が激減したと訴えていました。お腹がすいたと言ってくる子に与えるものが何もないという実情を涙ながらに語ってくれたのでした。他の女性たちも口々に、ウムチョの活動に加わることの意味を今回改めて確信したと話していました。こうし

て本当に困った時に自分たちの得た収入によって困難をどうにかしのぐことができたという喜びの共有がなされたのでした。

グラースさんは、ロックダウンで家の外に出られない間、ウムチョのことがとても気がかりだったと言います。工房には支援プロジェクトの資金を用いて購入した 14 台の足踏みミシンに加え、大妻女子大の学生さんたちと米国長老派教会からの寄付金を用いて２月に購入したばかりの工業用ミシン２台がおいてあります。警備員はちゃんときて、しっかり夜警をしているかどうだろうかと気になって、ロックダウンの中、決心してこっそり見に行ったそうです。そして警備員がちゃんと時間どおりに来て、警備がしっかりなされていることを知り、安心して帰ったというのでした。

今回のロックダウンが４月７日からのジェノサイド記念期間と重なり、国中を挙げての犠牲者追悼集会も、ウムチョ主催の集会も持つことができずにいます。フランソワーズさんはそのこと自体辛く、家にこもってジェノサイドの時に亡くなった家族のことをずっと考えていたといいます。また、ジェノサイド時の加害者を家族に持つエレナさんは、今年はウムチョの仲間たちの家族を一緒に追悼し、慰め、想いを寄せ会うことができなかったことをとても残念に思い、その間、仲間であるサバイバーの人たちのことに想いを馳せていたというのです。メンバー同士、会えないけれども、それぞれのことを思って祈っていたというのでした。和解と共生を目指して活動しているウムチョですが、ジェノサイドの加害者側、被害者側という分断を乗り越えて、共に苦しみや悲しみそして喜びを共有できる絆が培われてきているのを再確認し、嬉しい再会となりました。

ロックダウン下のそれぞれの様子について分かち合った後、女性たちは、工房に入室前の手洗い、マスクの着用、お互いの間の距離を保つ等の感染予防を徹底しつつ、今週から活動を再開する

工業用ミシンを前に喜ぶ女性たちと筆者

ことに決めました。できれば早く工業用ミシンの使い方に関する講習会を始めたいところなのですが、講師の方が隣町に住んでいて、まだニャンザまでのバスの本数がとても少ない上、バス代も通常の料金よりもかなり高いということで、しばらく我慢することになりました。

最後に、今回のコロナ危機で毎年の５月から６月にかけての私の帰国がキャンセルになりました。去年の５月の帰国では、ブックカバーや布バッグの販売で 116,500 円の売り上げを計上したので、今年、この収入が期待できないことがメンバーにとっては気がかりのひとつでした。国際郵便が再開したら日本に送ってそれを販売してもらえるだろうかと、いつも製作に熱心なコンスタンティーヌさんから質問がありました。私もこのことは気にかかっていたことの一つです。製品を日本に発送して、過去ウムチョの活動に関わってくださった元日本人留学生をはじめ、これまで作品の販売に協力してくださった教会関係者や友人たちにお願いして販売できないか検討中です。国際速達郵便にすると製品を安心して発送できる分、送料がかさむのですが、今回こういう新しい経験を通して、実際に商品を販売することの難しさ、負担しなければいけない経費のこと等、経営上の経験を深めていくのにもいい体験になることと期待しています。

米国の大学院で平和構築修士課程を修了して

デヴィッド・ニリンガボ

PIASS平和・紛争研究学科卒業生（2018年卒）
コンゴ・ピースネットワーク渉外担当職員

ウブムエ 45 号でご紹介した、PIASS 平和・紛争研究学科卒業生のデヴィッド・ニリンガボさんが５月、米国イースタン・メノナイト大学(Eastern Mennonite University /EMU)平和構築修士課程を修了されました。以下、佐々木が ZOOM を使って行ったインタビューの抜粋を掲載します。

Q．修士課程修了おめでとう。今の気持ちを聞かせてください。

とても大きなことを成し遂げ、とても誇らしく感じています。私の祖国、コンゴ民主共和国（以下、コンゴ）でこのような機会を得られる人たちは滅多にいませんから。海外の修士課程で学ぶ特別な機会が与えられたことに感謝しています。

Q．EMU の平和構築修士課程で学んだ大切なことをいくつか教えてください。

三つの大切なことを学びました。第一は平和構築の脱植民地化、第二はシステム思考（各要素間の相互依存性、相互関連性に着目し、全体像とその動きをとらえる思考方法）を平和構築の教育と実践に取り入れること、第三は、癒しをもたらす平和構築の教育と実践についてです。

まず平和構築の脱植民地化についてですが、これまで平和構築とか開発の分野で言われてきた多くのことは、植民地期に西欧の人々が考えたり行ったことに基づいています。コンゴの人々もルワンダの人々も、自分たちの発展のために何をしなければならないかを知っているのですが、資金の出元である西欧の人々は、自分たちがアフリカで物事をよりよく成し遂げるための知識を持っていると信じこんできました。私たちはそのような思考を乗り越え、非西欧の人々の伝統や文化の中にある知識や手法を平和構築に役立てようと努めています。具体的には、アフリカ、アジア、中東出身者への偏見を批判的にとらえ、それを乗り越える努力をすること、また、世界各地の原住民の知恵を積極的に平和構築の理論と実践に取り入れる必要があることについて学びました。

次にシステム思考ですが、EMU のプログラムでは、私たちの平和構築の取り組みが草の根や地域社会レベルのものであったとしても、それがどのように社会全体のシステムと繋がっているのかを意識できるように構成されています。地域社会のレベルで起きていることの中にも全体のシステムの在り様が表れていること、次に、地域社会のレベルで私たちが取り組む平和構築活動の内容を検討する際に、それら一つ一つがどのようにシステム全体に影響を与え得るのかを考えることの大切さを学びました。

平和構築の教育と実践が、個人と社会に癒しをもたらすものになるように努めることの重要性について学んだことも大きな収穫でした。私は以前から、平和構築活動の中でトラウマの問題に注意を払うことや、人々のトラウマ体験が再び呼び覚まされないように留意する必要性を理解していました。しかし、EMU のプログラムではそれだけではなく、授業や課題等のすべてが、学生本人の癒しにとって有益なものになるように工夫されていたことが印象的でした。

Ｑ．アメリカの生活のどこが大変でしたか？

まず何といっても冬の寒さです。大学のある小さな町の公共交通機関が貧弱だったため、冬の寒さの中に移動することが大変でした。次に苦労したのはアメリカの個人主義文化に適応することでした。私は隣近所が皆知り合いで、全てのものを貸し借りし合うような所で育ちました。アメリカでは夫が妻の車を運転するのに、妻から許可を得なければなりません。各自が自分の家に住み、お年寄りは高齢者介護施設に住んでいます。今住んでいる地域で私が知っているのは大家さんだけです。最初はこれらのことを理解するのに苦しみましたが、暮らしていくうちに人々の生活がどのように成り立っているのか、どれほど皆が忙しくしているのかを知ったことで理解できるようになりました。三つ目は、生活のペースがとても速いことです。IT 化が社会の全領域に浸透していること、また車社会であることから物事が進んでいくのがとても速く、慣れるまで大変でした。

そんなことから、アフリカの生活をとても懐かしく感じましたし、今もそう感じています。私は今日これから一人で食事をしなければなりませんが、ルワンダで留学生仲間と一緒に食事をしていたときのことがとても恋しいです。自分一人でスマートフォンやテレビを見ながら食事するのはとても味気ないです。食物とは親しい人たちと一緒に分かち合うものだという観念が私には沁みついているのです。しかし、ここでは皆が昼休みに自分一人のランチ・ボックスを冷蔵庫から取り出し、電子レンジでチンして食べて終わりです。

Ｑ．今後の進路について聞かせてください。

まずはしばらくアメリカに残り、児童養護団体でのインターンシップを続けます。その団体が子どもたちのトラウマの問題にこれまで以上に注意を払うとともに、子どもたちの癒しへの歩みをサポートする活動を豊かにしていけるようにお手伝いができればと思います。もう一つは、コンゴ・ピースネットワークの活動をアメリカの人々に紹介し、コンゴにおける平和構築活動を拡げていくことができるように、しっかりした資金調達の体制を構築したいと考えています。既に昨年から今年にかけ、コンゴでピースクラブの活動に参加する若者たちが PIASS の平和・紛争研究学科で学べるように、留学資金のクラウドファンディングに取り組みました。日本の皆さまからの協力もあり、２千ドルの第一次目標を達成しました。

PIASS 在学時のデヴィッドさん（左から 2 人目）

より長期的には、コンゴの平和構築に取り組む若者世代を育成する活動に取り組むつもりです。コンゴはとても大きいですし、数多くの民族から構成されています。コンゴの全ての民族を代表する若者たちが集結し、平和のために働くことができるように、彼らを訓練し、彼らがおのおのの地域社会で立ち上げる平和構築活動を支援するプログラムを作り上げたいのです。アメリカから帰国した後の 10 年間は、主にそのために働いていくことになるでしょう。

そして、いつか大学で平和構築を教えることが私の夢です。しかし、平和構築の現場経験を積むことが先決です。博士課程の研究テーマも、これから取り組む活動の中で明確になってくるのだろうと思います。

Ｑ．最後に日本の方々へメッセージをお願いします。

皆さまのご支援により、私を含め多くのアフリカの若者たちが PIASS の「平和構築と開発」学士課程で学んでこれたことに感謝申し上げます。

皆さまの教育支援プログラムがなければ、今の私はありませんでした。皆さまの取り組みは、アフリカとアフリカ大湖地域を変えるものです。もしこのプログラムがなければ、ルワンダ人、コンゴ人、ブルンジ人との若者たちが出会い、友人になることはなかったでしょう。このプログラムを通して、私たちは学び合い、お互いへの偏見を乗り越え、共に平和のために働く関係を築いてきました。私たちの中で将来、それぞれの国で影響力のある地位に就く者が出てくるかもしれません。私たちその時、PIASS で築いた関係を生かし、良いリーダーとして協力していくことでしょう。どうぞ今後も後輩たちへのご支援をよろしくお願い申し上げます。

事務局からのお知らせ

● 新型コロナウイルス感染が拡大しています。世界中が不安と緊張の中に置かれています。医療態勢が脆弱な国々での感染拡大が心配です。佐々木さんがいるルワンダも例外ではありません。覚えてお祈りください。

● パンデミックの下で、どのように生き延びるか、パンデミックが世界にどのような影響を残すのかを、佐々木さんのルワンダでの活動報告を受けながら、熟考していきましょう。

● 佐々木和之さんがルワンダで本格的に活動を始めて約 15 年。この間、唯一無二の働き人として、現地での活動と帰国報告という多忙な日々を過ごしてこられました。コロナウイルス感染拡大の状況にもよりますが、今年 8 月以降の約 2 ヵ月間、長期休暇を取り、心身の静養と研鑽の時を持っていただくことを予定しています。どうかその環境が整えられますようにお祈りください。また、このために 2020 年は報告のための帰国予定はありません。どうぞご理解ください。それでも、ルワンダでの“平和構築を将来担う若者を育成する活動”は進められます。これまでと変わらぬ祈りとご支援をお願いいたします。

● 「ピースビルダー育成プロジェクト」への寄付をお願いします！

支援会では、佐々木さんが取り組む“平和構築を将来担う若者を育成する活動”に、皆様の支援金を用いてきました。しかし現在、支援会や積立金からの支出が困難になっています。そこで、この活動のために、「ピースビルダー育成プロジェクト」への寄付をお願いしています。内訳は、PIASS で学ぶ学生への奨学金 60 万円、PIASS ピースクラブ活動費 20 万円、日本に留学する留学生への学習支援 20 万円の計 100 万円です。振替用紙に「育成支援」と明記してお送りください。
2020 年 4 月現在 477,000 円のご寄付が送られ、心より感謝しています。現在も受付継続中です。

●郵便振替口座　00250-0-112907　佐々木さんを支援する会●

●佐々木さんを支援する会ＨＰ（ホームページ）

http://rwanda-wakai.net/

佐々木さんの活動報告、写真館、等。ＨＰから入会手続きも可能です。 佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

●世話人会　中條智子（長住教会牧師）、加藤　誠（大井教会牧師）、播磨　聡（広島教会牧師）、
蛭川明男（洋光台教会牧師）、米本裕見子（日本バプテスト女性連合幹事）